

講評

批評家審査員 ビュールク トーヴェ

東京国際芸術祭ワールドコンペティション 2019 では参加作品を評価する基準として、次の2点を掲げている。

1. 作品、またはアーティストは2030年代に向けて、舞台芸術の新たな価値観を提示しているか
2. その価値観の提示の仕方において、技術的に高い質をもった表現がなされているか

1は作品の質が、2はパフォーマンスを実行する技術が求められており、いずれも今後10年成長し続けるためのポテンシャルを有しているかを問うているといえるだろう。そのため、今回の審査では以下の基準で参加作品を評価した。

① 作品に「考えさせる」メッセージが備わっていたか

芸術には、現代社会で起きている現象や問題を抉り出し、観客に知らしめる機能がある。舞台芸術においても、現代のさまざまな問題を提起することは、重要な役割のひとつだ。そのため上演作品に社会的メッセージが盛り込まれているか、そのテーマがいま取り上げるのにふさわしいかについて考察した。

② 演出が効果的か、また演者に十分な表現力があつたか

それぞれの作品について、メッセージを伝えるのに効果的な演出や表現が行われていたかを検討した。メッセージに対する演出や表現が成功していれば、同様の制作プロセスを次作以降にも援用でき、今後の発展に資するであろう。

③ 芸術性と集客力のバランスが取れているか

高い芸術性を求めると作品のメッセージはわかりにくくなるリスクがある。逆に、もっぱらわかりやすくしようとすれば、芸術性の低いエンターテインメントとなってしまう。舞台芸術はつねにこのアンビヴァレンツに悩まされるが、芸術性を保ち、かつわかりやすくメッセージを発信しようとする姿勢は重要だ。芸術性と集客力の観点からも評価を試みた。

私は近世期歌舞伎研究者として、江戸歌舞伎劇場を「公共圏」として捉える研究を行っている。公共圏とは①誰もがアクセス可能な路地や市場などの社会インフラ、②身分に関係なく、入場料を支払えば誰もが入場できる空間、③自由に意見を発信できる空間を指す。日本では古代より、芸能は路地や市場で披露さ

れ、近世になると共通空間としての劇場が生まれた。明治期以降、近代劇場は自由に発信できる場として発達してきた。

西洋では17世紀以降、社会批判をテーマとする作品が上演されてきた。当時、人々はまだ意見を自由に発信できなかったが、そのなかで社会問題を提起する舞台芸術の果たした役割は大きなものだった。現在ではSNSなどの普及により、誰もが自由に意見を発することができるが、こうした状況において現代の舞台芸術が発するメッセージにどのような意義があるのか。舞台芸術と公共圏との関係を踏まえ、参加作品を評価した。

今回、以下の6作品の審査を担当した。

「可能性は風景の前で姿を消す」(エル・コンデ・デ・トレフィエル、バルセロナ・スペイン)

「たびたび罪を犯しました」(シャルル・ノムウェンデ・ティアンドルベオゴ、ワガトゥグ・ブルキナファソ)

「ハウリング・ガールズ」(シドニー・チャンバー・オペラ、シドニー・オーストラリア)

「汝、愛せよ」(ボノボ、サンティアゴ・チリ)

「紫気東来ービッグ・ナッシング」(戴陳連、北京・中国)

「ソコナイ図」(dracom、大阪・日本)

「可能性は風景の前で姿を消す」

ヌード撮影会などのイベントを題材にした作品。衣服を着脱する場面と誇張した動きでゴングを鳴らす場面、普通に歩く場面と身体を不自然によじる場面などが繰り返され、日常生活と芸術の関わりについて問いかけていた。演者は言葉を発せず、セリフはスクリーンに投影され、また朗読が流された。

①被写体また生身の人体が芸術作品となり得るか、さらに芸術とは何かについて問うていたが、メッセージとしては物足りなかった。その奥にある問題を提起してほしかった。

②テキストや人体の使い方を変えることによって芸術を表現する演出は効果的で、その完成度も高かった。

③複雑な表現方法ながら、メッセージは伝わった。芸術性とわかりやすさのバランスが取れていた。

総合評価：テーマは新鮮味に欠けたが、役者の動きと朗読との対比、また自然な動きと不自然でアンバランスな動きの対比が効果的で、その滑稽に微笑がこぼれた。

「たびたび罪を犯しました」

本作は、ひとりの墓守が5人の犯罪者の霊に憑かれ、それぞれの霊の罪を償うという一人芝居。演者は動物の仮面によって独裁者、殺し屋、警官らを演じわけ、出身国の伝統的な身体表現を取り入れて演じていた。

- ①ひとつの政治的状況において権力者とそれぞれ立場の異なる一般人のあり方を描いていた。現代の各国で問題となっている権力と個人的責任のありかたについて考えさせる、刺激的なパフォーマンスだった。
- ②墓守が5つの霊を演じるという設定が、作者の国固有の政治的問題とも受けとめられてしまい、残念だった。
- ③メッセージがわかりやすかったが、普遍性に欠けた。さらに一般化することができれば、身体表現の幅も広がり、より多くの人に受け入れられるのではないだろうか。

総合評価：若いアーティストによる作品で、これからますます発展し、2030年代 2040年代を担っていけよう。

「ハウリング・ガールズ」

9.11 アメリカ同時多発テロのトラウマで声を失った女性らの苦悩を描いたオペラ作品。暗闇のなかで、叫び声がおよそ30分も続き、その後舞台が徐々に明るくなり、やがて演者がいることが判明する。

- ①テーマとして9.11を取りあげるのはやや古く感じた。またひたすら叫び声が続く、展開につながる糸口がなかった。トラウマを表現するだけでは物足りず、もったいないと感じた。
- ②演出は強烈的だった。豊かな声量の歌手らによる叫び声は圧倒的で、トラウマをみごとに表現していた。
- ③芸術面での完成度は高かった。この劇団は音と音楽を用いる演出によって、今後も意義ある作品を制作していけよう。

総合評価：個人的には大嫌いな作品だったが、とても完成度が高い作品だった。

「汝、愛せよ」

「他者」の視点から差別について考察する作品。未来の医師たちは、現場にいない同僚の噂話をするうちに差別的な言動が多くなり、差別する側とされる側が目まぐるしく入れ替わっていく。ユーモアに溢れ、ドタバタ劇のように早いスピードでドラマが展開していった。

①誰もがもっている他者に対する違和感について考えさせた。人種差別や移民の問題が根強く残る現代にふさわしいテーマだった。

②登場人物の人間関係が次々に変わっていく演出はテレビドラマにもみられるもので、演劇に不慣れな観客にもわかりやすいだろう。セリフのテンポよく、全体的に説得力があった。

③日常における差別の発露というメッセージはわかりやすかった。しかも、物語の展開も早く、芸術性も高かった。

総合評価：別の惑星から来た“移民”の治療中に傷を受け、その肉体的苦痛を通して差別による心理的苦痛を見つめた。そして、他人も自分と同じ苦痛を感じていると気づくことで、他者を受け容れることができるという、差別を克服する糸口も提示していた。本作に使用した手法を踏まえ、次々と新作を作り続けてもらいたい。

「紫気東来—ビッグ・ナッシング」

演者が影絵やオブジェと子供のように戯れる本作を観て、過去と現在、夢と現実の関係について考えさせられた。靴を修理する古い機械や祖母の写真などを用いて、過去の記憶を表現していた。最後の場面では、ストーブのやかんからスチームが立ちのぼると、次の瞬間、舞台に白い鳩が飛んできた。

①祖母の写真に唐時代の物語に基づいた影絵を重ねたり、影絵と演者の影が一体化することで、過去への憧憬や個人の記憶を表わしていた。本作は、現代社会の問題については触れていなかった。

②不思議な演出が多数用いられていた。いずれも意味は判然としなかったが、最後に舞台に飛んできた鳩が演者の足元に止まったとき、夢の世界が本当に現実になったような気がした。演出はとても効果的だった。

③芸術性は高いが、わかりやすいとは言い難い作品だった。しかし、独特の柔らかな雰囲気があり、一定数の人に受け入れられるだろう。

総合評価：私の評価基準では判断できなかったが、とても魅力的な作品だった。

非現実的で甘美な世界に心が癒された。個人的にまた見たいと思った。

「ソコナイ図」

実際に大阪で起きた事件を元に作られた作品。親から相続した土地にマンションを建て、悠々自適に生活するはずの姉妹が、ローン返済に窮し、しかも相続税に対する無知も重なり、自立した生活ができなくなる。苦境のなか、姉妹は何もしないことを選択する。それは自殺ではないが、ついに餓死する。

①姉妹の衰弱死という現実の出来ごとを描くことで、いま論じるべき日本の問題を真正面から取り上げていた。

②祇園精舎の鐘を思わせる音や、いくつかの単語を繰り返すことで、死に近づくと時間を刻むなど、的確な演出が行われた。

③芸術性が高く、メッセージもわかりやすかった。ただ、テーマは暗く、広く受け入れられるのは難しいかもしれない。

総合評価：本作は、複雑で不親切な経済の仕組みが横行する日本社会の一面を描き出した。また苦境にあることを知りながら手をさしのべない隣人の冷たさなどとも相俟って、日本の問題を照らす、とても意義ある作品だった。ただ姉妹の死を、無為を選択した自己責任とすることに、個人的には納得できなかった。

審査は以上となる。ところで、今回は舞台芸術を論じる新しい“場”として、それぞれアーティストと批評家で構成された2つの審査委員会が設置された。立場の異なる者による議論の場が新設されたことは歓迎するが、両委員会が意見交換をする機会もたれなかった。両委員会が交流すれば、さらにいい結果につながるのではないだろうか。今後、舞台芸術を論じる新たなプラットフォームが生まれることに期待したい。